国際学部　2 年
21014065　田中久幾

2015~2016　中国・北京　短期留学報告書

21014065　田中久幾

この北京、短期留学で得たものは非常に多く、大きいものとなった。

留学をするにあたって、一般的に大きな壁とされるのが「言語の壁」と「文化の壁」である。その文化の壁とも言えるものが顕著に現れたのは、8 月 30 日、出国時の飛行機に現れた。日本発、北京行きの便が大幅に遅れたのである。その理由としては考えられたものは、8 月 30 日当時、現地北京ではオリンピックが開催されており、北京首都空港の上空も大渋滞で混乱していたという事が考えられた。このように出発時から北京留学の洗礼を受けた。到着してからも、それらの壁は目の前に大きく立ちはだかっていたことを今でも覚えている。まず、言語の壁である。約一年間、大学で中国語の授業を受けたわけだが、そこで得た中国語力は微塵も役に立たなかった。日常会話くらいできるだろう、と思っていたが、全くできなかった。これが一度目の挫折であった。もちろんどこで何をするにも中国語が必須であった。ある時、買い物をするために勇気を振り絞り郊外に出た。その道中でマクドナルドの広告が目に入り、友人とマックへ行こうとした。当然、広告が目に入っただけであり、店の場所はわからなかった。そこでまだ中国語力が低い自分たちは、英語で街を歩いている人に話しかけてみた。ここでも日本と中国の文化の違いが露見する結果となった。日本だったら、外国人に話しかけられ、道を尋ねられると、英語が話せなくても、身振り手振りで伝えようとする努力がみられることが多いという。だが、中国ではまず、耳を傾けようとしない人が多かった。そのような行動を取る中国人は、だいたいが年配の人であるというのも、中国・北京に約半年間住んでわかったことである。その日は何とか若い人に話を聞いてもらうことができ、マクドナルドへの道も教えてもらうことができたが、この日も留学の大変さを知った 1 日となった日であった。後日知ったことだが、マクドナルドは中国語で麦当劳（maidanglao, まいだんらお）という。英語の McDonald’s に発音が似ている？らしい。このような中華製英語が多い。マクドナルドなどの和製英語を使っている、日本人の私にとっては興味深いものであった。他に例をあげるなら、chocolate である。中国語では、巧克力(qiaokeli，ちぁぉくぅりぃ)と呼ぶ。日本語ではチョコレート。これも発音から来る、いわゆる当て字によってつくられた言葉である。日本人の私にとっては、中華製英語には違和感があるが、これは中国人にとっても、他の外国人にとっても和製英語も中華製英語も両方を違和感に思うであろう。幼いころからそうなっているのだから、そうなのだ。という言葉で片づけることができてしまう事ではあっても、やはりそういった、国によってそれぞれの英語の聞き方、表現の仕方の違いは興味深いものであると感じた。そもそも、欧米人にとっては、英語は英語であり、英語として学習し、英語として使っている。わざわざ、自分の国の言葉で、英語を表現しようとしている考え方が間違っているとは言わないが、やはり言語を学んでいると、必然的にそこに違和感を覚えてしまう。これは外来語を自分の国に取り入れようとする、一種の文

国際学部　2 年
21014065　田中久幾

化なのではないかと感じた。

　もちろんこのような文化の違いは言語だけではない。例えば、店員の接客の態度である。これを文化の違いだと感じてしまうのは、私が日本人だからかもしれない。日本では「お客様は神様だ」という言葉が非常に有名であり、それを営業理念としている企業も少なくはないだろう。だが、日本人の客には積極的に自分が神様である、と全面に神様の姿勢で店に入る者は少ないだろう。私自身も、勿論そう思ったりはしない。それは、その時はお客であるが、異なる状況下では目の前の店員が、お客様にもなり得るという事が密かにそうさせていて、そのような状況を表すには暗黙の了解などといった言葉が相応しいと考える。このような日本の文化は日本に来る外国人には有名であると同時に、驚かれ、異常だ、とも言われている。もちろん、日本で生まれ、日本で育った私はそのような文化（店員の態度が良い、礼儀正しい）に違和感を覚えたことはないし、そもそもそれを日本特有のもてなし方だ、とも思ったことはなかった。だが、この中国留学で、そのもてなしは日本の文化であり、中国では全く通用しない。例えば大学寮の受付の人は、接客中に平気でため息をつく。この接客中にため息をつくという態度は、日本ではまず考えられないが、中国なら接客するうえで一般的に問題ない行為とされているのだと感じた。接客に対する姿勢は日本で育ってきた人々にとって、辛く感じる異文化だと言えるだろう。接客で他にも例を挙げるなら、タクシーでの接客を挙げる。私はまだ、中国に慣れ初めているからか、タクシーの接客でそこまでの違和感を覚えたことはない。しいて挙げるならば、運転が荒いということ。車酔いを起こす人は間違いなく北京のタクシーに乗れば、その症状が出るといっても過言ではないほどだ。他には、接客面ではないが、交通信号を守らないことである。前方の交通信号機が赤で止まれ、であっても、進む車はたくさんいる。歩行者にとっては、横断歩道を渡るだけで命がけである。聞くところによると、中国で車を運転することができれば、世界のどの国でも運転できる技術があると言われるほどだ。他にも友人の話を聞いていると、タクシーに乗車中、渋滞にはまって全く身動きが取れなくなってしまった時に、タクシー運転手から「もうこんな渋滞で進めるわけがない、降りて地下鉄で行け」と言われ、半ば強制的に、降車させられたという事もあったようだ。その他にも、タクシーに乗車してすぐに「どこの国の人だ？」と聞かれ日本人だと、言ったら、降りろと言われたという、耳を疑うケースもあったようだ。反日感情が強いタクシー運転手だと、客としてもあつかってくれない場合もあるのだ。実は私も、これに似たケースに遭遇したことがある。大学のプランの四川研修中、タクシーに日本人の友人たちと、乗車した際に、どこの国の人だ、と聞かれ、日本人と言ったら、なら乗せてやる。と言われたことがある。友人に聞いた話とは、逆のケースであった。そのタクシー運転手が言うには、日本が中国大陸で戦争をしていた時、四川の人々には被害を与えなかった。だから四川のタクシー運転手は北京の人たちに比べ、日本人が好きだとも言っていた。このような体験をして、本当はぞっとする話なのかもしれないが、興味深い体験をしたと感じた。タクシー関連で言えば、中国には黒车(ブラックタクシー)と呼ばれる、日本で言うところの

国際学部　2 年
21014065　田中久幾

個人タクシーがある。これには、絶対に乗ってはいけないと大学からも入学式に警告があった。このタクシーは通常より、高額な運賃がかかる他に、目的地とは別の危険な場所に連れていかれる可能性もあるという。中国でタクシーを拾おうとすると、高確率で黒車も走っていることが多いが、その際には気を付けた方がよい。

このような危険な出来事のほかに、楽しいことは勿論、多々あった。日常の授業、外国人の友達とのコミュニケーション、北京の夜という前学期最大のイベント。積極的に外国人とのコミュニケーションを図り、イベントなどにも参加した。まず、日常の授業は、常に教師の方が、授業内容を分かりやすくするためにＰＰＴをつくっていた。その他に、授業の進め方も生徒により多くの中国語を話させようと努力している姿が顕著に表れており、クラスの雰囲気もとてもよかった。クラスメイトやいろいろな機会で知り合った友達と昼食を一緒に食べ、週末にはどこかに出かけ、とても楽しい時間が過ごせたと感じている。前学期で一番記憶に残っているのは、「北京の夜」という、師範大の中での最大のイベントともいえるものだった。北京の夜は様々な国単位で、各種各様なダンスを披露したり、歌を歌ったり、様々な国籍の人が一緒になって発表したりするなど、留学生向けのイベントである。私は日本人として、日本人の友人や先輩方と、『千本桜』のダンスを披露した。振付やＰＶなどを一から作るため、準備期間が約 3 か月、ほぼ毎晩みんなで集まって練習することなど、相当な時間を要した。短期留学生にとって、北京の夜の為だけに時間を使うのは、勉強や外国人とのコミュニケーションをとっていくにあたって少し苦しい思いをしたが、本番当日の観客の声援やイベントが終わった後の観客（外国人）に、「日本は本当に素晴らしかった」と言ってもらえ、苦労が報われた瞬間の喜びを考えたら、来学期からの新潟国際情報大学からの短期生にもぜひ参加して欲しいと思う。

実際に留学し、現地で「本物の中国語を学べる」といった良い点は勿論のこと、一気に様々な国の人とコミュニケーションを取ることができることができるのが実は一番いい点なのではないかと実感した。留学している際に、様々な国の人とコミュニケーションをとり、友達になれた。その中でも特に仲良くなれたのが韓国人と中国人である。現在日本のメディアで韓国や中国のことを耳にしない日は無いといっても過言ではないだろう。だが、それらのメディアで伝えているのは、それらの国の政治活動を批判するかのような内容のもの、反日の動き、などである。例えば「今日、韓国はこのような良いことがありました。中国ではこのようなすごい事をやっています。」など、肯定的な伝え方をしているメディアはまず少ない。これらを日常的に見ている日本人の中の一部には、「反日国家」という印象が根づいているのではないかと思う。もちろん、それらの国の中で反日思想を持つ人は当然いるが、日本も同じようにそれらの国に対して良く思ってない人もいる。しかし、留学で友人に慣れた、韓国人や中国人の多くは、私のことを国単位でみている傾向は全く見られなかった。親しくなれば、彼らと過去の戦争の話をし、「私は日本と母国が戦争をしたことを決して忘れない」とはっきり言われるケースもあった。だが、その彼らも日本人のことを純粋に嫌っている訳では決してなかった。しっかりと、彼らなりに歴史

国際学部　2 年
21014065　田中久幾

を勉強し、その歴史を忘れてはいけない、という事をいっただけである。もちろん、日本人からみても、歴史は変えられないし、忘れてはいけないものである。そのような歴史とうまく付き合っていきながら、今を生きる人々がお互いのことを尊重しあえるようになったならば、これから先の傾向は大きく変わっていくのではないかと感じた。

今回、この短期留学をして本当によかったと感じるし、現に私は今、留学を延長し、現在も中国・北京にいる。これから先もこのような苦労や楽しさを何度も味わうことになるだろうが、私なりに努力していきたいと考えている。